

# 拔隊禪師の公案觀

市川白弦

## 一

禪の見性思想は禪宗の成立とともに古いが、わが國においてこれを最も端的簡明に示したものに拔隊得勝禪師はつすゑ（西、一三二七—一三八七）がある。師は自ら少年の頃よりひとつの疑起り、「抑も此の身を成敗して何ぞと問へば、我と答ふる物は是れ何物ぞと一念疑ひ初むるよりして、歳の重なるまゝに疑ひ深くなるによりて、出家せんと思ひ立ち候ひし」（鹽山假名法語）と述懐してゐるが、師によれば凡そ求道の眼目は自性を見ることであつた。

「輪廻の苦を免れんと思はゞ、直に成佛の道を知るべし。成佛の道とは自心を悟る是れなり。」

（鹽山假名法語、序言）

「成佛の望あらん人は、佛になるべき主を知るべし。」（同書、與三神龍寺尼長老）

「もし實に極樂往生の理を知らんと欲せば、まづ往生すべき主を知るべし。」（鹽山和泥合水集）

求道の願心はすべて見性への願心とならねばならぬ。江月照し松風吹くの清絶は、永夜の清宵何の所爲ぞの參究を経て、はじめて眞實にわが屋裡のものとなる。溪流の響を以て「是汝ガ入處」と示した禪者があるが、流水聲を以て禪境への入處たらしむるものは、學人における自性究明の願心でなくてはならぬ。

「生死大事のために自心を明らめんと欲して志の熟する時、自然に色を見て心を明らめ、物に附して道を悟ることあり。然るを始めよりたゞ萬象森羅を見て自己を明らめんと欲せば、度を失うて必ず邪路に入るべし。たゞ自心を明らめんと要せば、直に一切の聲を聞く底の本源を見窮して、心路絶し命根斷する處、これ自己安身立命の時節なり。」(和混合水集)

見色明心、聞聲悟道であるが、拔隊が説くのは何よりもまづ、そしてあくまで、本源の見窮である。「幾度も悟らるゝ悟りをばうちすてゝ悟る主に還り根本に還る」(法語序言)ことが核心中の核心であり、諸般の體驗は本源的に主體的なるものの創造的觀照として、はじめて不退轉の自由、眞實の王三昧の諸相となる。「九尾の狐は多く窟を戀ひ、金毛の獅子は身を翻へすことを解す。」(和混合水集)

二

悟らるゝ處を愛せずして、直に悟る主を窮むる(法語末段)ことが拔隊の提示の眼目であるが、この見

地から導かれる公案觀は次の通りである。

一、自性は公案の根本である

「生死輪廻の苦を免れんと思はゞ情識を盡すべし。情識を盡さんと思はゞ心を悟るべし。心を悟らんと思はゞ坐禪をすべし。坐禪は工夫を宗とすべし。工夫と云ふは公案を深く疑ふべし。公案の根本は自心なり。」(法語、與<sub>二</sub>神龍寺尼長老)

二、自性を公案とせよ

「自ら本性を公案となして御覽すべく候。」(同、井口禪門返答)

三、自性と公案との相即

「問、近代の善知識、或は直に自性を見よと示し、或は話頭を見よと示さる。何れか是なるや。

答、意句もと二つにあらず。千句萬句たゞ自性の一句なるゆゑに、自性は話頭の根本なり。本を得て末を憂ふることなし。この故に初心の學者まづ直に自性を見窮せば、一切の公案自然に透得すべし。もし自心を明らめ得たりと存するとも、古人の話頭をとほり得ずんば、自己未だ徹悟せずと知るべし。かるが故に古人の曰く、未得底の人は句に參ぜんより意に參ぜんに如かじ、已得底の人は意に參ぜんより句に參するに如かすと。

僧のいふ、然らば某等今初心の學者なり、話頭を見るは誤るべしや。

師の曰く、爾今いづれの話頭をか見る。

僧いふ、父母未生前本來の面目。

師曰く、すでに是れ本來の面目、これ爾が本源の自性にあらすや。爾自らあやまりて他人の言句となす。

又僧問、某初心の學者なり、即心即佛の話を與へらるゝは是れ善知識の誤なりや。

答、既に是れ即心即佛、これ古人の公案を與ふるにあらず、直に爾が即今の自心を指す。主家のあやまるにあらず、爾自ら己れに迷うて言句となす。この故に百丈の曰く、一切語言宛轉して皆自己に歸すと。もし實にかくの如く徹悟せば、豈に只だ佛祖の奇言妙句のみ自己ならんや。萬象森羅、畢竟じて自己にあらざるものなし。(鹽山和泥  
合水集)

公案を見るといふことは單に特定の公案を見るといふことではなく、公案の根源としての悟る、主を見ることでなくてはならぬ。悟る主を見るといふことは、何らか主體的なるものを、もしくは觀照的情感を、悟らるゝ悟りとして觀照することではなく、見られたる時への感傷と見られぬ時への焦燥とを離れた現在の生を創造的觀照において行することである。純一なる觀照は悟る主の本來的

な姿相であり、行爲的觀照はその純なる活動であるが故に、したがつてこの本來的な在り方、働らき方に如同する生活は、そこから萬殊の古則公案がそれぞれの時處位に應じて發露する源泉であるが故に、一切の公案を自然に透得する眼中の眼である。これを逆に言ふならば、公案を透得し得ないといふことは、この眼が未だ澄澈してゐない證據である。自性は諸公案の母胎根源であり、諸公案は自性見窮の親疎深淺を検する鏡である。

### 三

「幾度も悟らるゝ悟りをすてゝ悟る主に還る」といふ提示は一切の悟りを感傷化せぬ創造的自由への示唆であるが、ひいてそれは後代の階梯的公案禪における如き省悟の諸相、およびかゝる公案禪的修爲法に對する批評の意味をもつと見られる。このやうに見るならば、拔隊の示すところは、近世の公案禪と畢竟同じ一境に歸するとはいへ、少くとも學人接化の具體的方法としては、多少趣を異にするといふべきである。この意味において、拔隊の「千句萬句ただ自性の一句」の提示は、もとより近世公案禪の根本精神でもあるが、さらに一層「千疑萬疑只だ是れ一疑」「一了一切了、一斬一切斬」を提唱した宋僧大慧宗杲の公案觀に近いものを感じしめる。但し大慧の場合には萬疑を破るものは任意の一話頭であり、拔隊においては萬句（話頭）を決するものは自性の徹見である。

大慧における「一了」の「一」は任意の一話頭であるが、拔隊における「一句」の「一」は自性にほかならぬ。もとより眞實には「意句もと二つにあらす」(和混合)「一千七百の公案は皆一心の異名なり」(大應)であるが、箇々の公案を見んとするのと自性を見んとするのでは、參、究、當、初、の態度情感において多少趣を異にするものなしとしない。したがつてまた拔隊が自性を公案とすべしといふ場合の公案と、自性は公案の根本なりとか、一切の公案自然に透得すべしとかいふ場合の公案とは、一應秩序を異にすると見られる。かくて自性は「悟る主」であり「話頭の根本」であり「幾度も悟らるゝ悟り」の内容乃至對象でないといふ意味において、公案はいはゆる敲門の瓦子であり、自性を公案なりと會すれば當面に蹉過すといふ見地(和混合)も成り立つのである。

もとより自性に徹すれば萬象森羅自己にあらざるなく、松色溪聲主人公の姿にはかならず(和混合)そしてこの根本消息の故に萬象は學人に公案として現成するのであるが、しかもそれを公案として受けとるものは自性見窮の願心にはかならぬといふのが拔隊の所見であり、そのことが直ちに自性は話頭の根本なりの見地に照應する。そこで大慧の場合には生死を脱却せんとするものは何か一つの話頭を見よといふことになり、拔隊においては脱却せんとする主を見よといふ風に説く。従つて公案を提示する場合にも、拔隊においては「本來の面目」とか「聽法底の人」とか「萬法と侶たら

ざる者」とかいふ趣きのものが選ばれる。大慧は諸多の公案を用ひながらも中軸的には「無字」を提撕したのに對して、拔隊は主として「本來の面目」を提示した。そしてこのことは近世公案禪の體系における「法身」的公案が、「無字」「本來の面目」等を一應第一關的制約のもとに配置してゐる事實と、併せ考ふべき事柄である。

#### 四

およそ妄執を拂拭する道は、これを大別して、人(個我へ)を奪ふ道と境(外境へ)を奪ふ道とすることができる。主として前者をとるものに盤珪があり、後者をとるものに拔隊がある。人を奪ふ道はより多く倫理的色調を帶び、境を奪ふ道はより多く形而上的陰影をもつ。拔隊と盤珪との禪風をひとまづ臨濟義玄禪師にまで遡るとするならば、臨濟における「即今目前聽法底の人を識取せよ」といふ方面を承け繼ぐものが拔隊であり、「爾が今の用處、什麼をか缺少し何れの處をか修補せん」といふ方面を舉揚するものが盤珪だと見られるであらう。拔隊は臨濟禪における修の面を舉揚して證をそれに融化させ、盤珪は證の面を舉揚して修をそれに會入させたと見られる。そして再び修の面を厳しく仔細にとらへて近世公案禪の骨格を固めたのは周知の如く江戸中期の白隱慧鶴であり、白隱に至つて「悟後の修行」は法身的公案透過後における諸公案の參究と見られる傾きを示した。か

くて拔隊の禪風は公案禪の否定者盤珪と公案禪の組織者白隱との半世紀を隔てる鋭い對決の發現以前の比較的平穩な世界に位置すると考へられる。いまかりに拔隊の「古人の話題をとほり得ずんば、自己未だ徹悟せずと知るべし」といふ面を強調して、わが證悟の眞僞深淺を點檢するためには是非とも古則公案によらねばならぬ。公案こそ最後の斷案を下す牢關だと考へるならば、自性を見るとか本來の面目に徹ずるとかいふことは、近世公案禪の場合の如く、謂はゞ參究的階梯の端初基底のすぎぬといふことにもなるであらう。しかしながら拔隊の本領はどこまでも自性は公案の根本であり、幾度も悟らるゝ悟りをすてゝ悟る主に還るべしといふところにある。そしてこの根本精神は究極において近世公案禪の骨髓でもあること既述の通りである。

なほ拔隊法語の指示に従つて參究了畢したものに江戸末期の禪匠澤水長茂がある。澤水の公案觀は拔隊を通じて大慧の見地に近づいてゐる。

「公案は何れなりとも唯一公案をとり定めて深く疑ふべし。實に一公案を悟明せば、一千七百則一時に見究すべし。一句了然として百億を超ゆといへり。公案の事、此の公案を工夫して又外に移り、聞く主をやめて趙州の無に移りなどする時は、心頭二途にわたりて大疑團起らざるもの也。たゞ初より末々まで一公案を深く疑ふべし。愚人は笑ふべし、智者はよくこれを知る。」



白隠以後に屬する澤水の見解が、右のやうなものであつたことは興味ある事柄である。

後記。頁數の都合上、古田氏の論稿を機縁に急遽取纏めたもので、朦朧杜撰備へに大方の高教に俟つ外ない次第である。

註①デカルトによる「コギト」の提立が哲學におけるひとつの維新であつたやうに、禪の自性究明の道は宗教における大きな

維新である。この思想は既に左の諸錄に見えてゐる。

「夫學道之法。必須先知根源。求道由心。又須識心之體性。分明無成功業可成。」(達摩、證心論)(鈴木大拙博士校、少室遺書に據る。)

「夫修道之本體。須識當身心本來清淨。不生不滅。無有分別。自性圓滿清淨之心。此是本師。乃勝念十方諸佛。」(達摩、修心要論)(同前)

「汝欲明本心者。當審諦推察。遇聲未起覺觀時。心何所之。是無邪。是有邪。」(景德傳燈錄卷三、慧可章)

「我本自性清淨。識心見性。自成佛道。」(六祖壇經)

「但悟一心。更無少法可得……但如今識取自心。見自本性。更莫別求。」(黃檗希運、傳心法要)

②參究の工夫について拔隊の説くところも亦自性見窮の提示と完全に照應する。曰く、「自心を悟らんと思はゞ、先づ念の起る源を見るべし。たゞ疑ても痛めても立居につけても、自心これ何物ぞと深く疑ひて、悟りたき望みの深きを、修行とも

拔隊禪師の公案觀

(九)

